

---

# 落花流水

桜井 紫苑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

落花流水

### 【Nコード】

N2130V

### 【作者名】

桜井 紫苑

### 【あらすじ】

突然異世界に召喚された主人公。彼女はそこで凄く綺麗な男性と出会う。彼は彼女が召喚された国の王様であり彼女を召喚した張本人だったが、綺麗なのは外見だけで口は悪く性格もあまりよろしくなかった。そして彼女はすぐに還れない事実を知らされ、召喚された理由である『国と竜との約定更新の為』に橋渡し役を頼まれるが、それは思いもかけない運命への始まりだった。そして全ての真実が明かされた時、彼女は深い想いを知ることになる。 異世界トリックのお話です。

## 第1話

扉を開けると、そこは自室ではありませんでした。

「は？」

少女の間拔けな声が大きな広間に反響した。

そこは高校の体育館ほどある広い空間で、真っ直ぐに敷かれた赤い絨毯の先には映画でしか観たことのない、立派な玉座が存在感を放っていた。

当然、豪華絢爛（こっけんらん）と言う言葉が相応しい煌びやかな部屋で、上に見える大きなシャンデリアもきめ細かい細工が施された窓や柱も、取り囲む兵士も目の前に突き付けられた槍も、彼女にとっては全てが現実とかけ離れていた。

「疲れ目？」

「馬鹿か、お前は。疲れ目のレベルじゃないだろ」

現実逃避から出た言葉を、にべもなくその男は切り捨てた。

「なら幻覚？」

はっ。鼻で笑われた。

少女は考えた。

自分は寝る為に部屋に向かっていた。そして扉を開けるとコレな訳で・・・。

「夢か。そんなに眠かったのか、私」

「あり得ない。どうして召喚されたのがこんな低能な女なんだ・・・」

再び間髪入れずに反応が返る。

「あり得ないのはあんただろうが——！！」

少女は、さつきから失礼にも程があると言わんばかりに言い返す。先程から茶々を入れていたのは、立派な玉座に腰掛けた人間離れした美しさの20代半ばの水色の髪の方だった。

「陛下に何という無礼を！」

兵士達の槍に籠められた力が増した気がした。

「かまわん。槍を下ろせ」

男はどこまでも高圧的な態度だった。

目がチカチカする……。少女は何処に焦点を合わすか考えた。

それもそのはず。目の前の兵士達の色彩は明らかに彼女の常識から外れていた。

黄緑、紫、オレンジ、ピンクにコバルトブルー。

彼らはカラフルな色が髪や目の色だった。

「むしろ黒がない……」

見慣れた色が無いのはここまで違和感を感じるのか、と少女は実感した。

「黒は高貴な色だからな。黒を持って生まれる者はこの世界にはもっていない」

男は告げる。

「ようこそ、高貴な色を纏った異世界の人間よ。我が国はお前を歓迎しよう」

ニヤリと笑った男の顔は、それでも美しかった。

「いえ、丁重にお断りして帰らせて頂きます」

さらりと断りの言葉を述べた少女もまた、美しい容姿の持ち主だった。

この相容れぬ2人が、後の世では伝説の王と后として語られるのだが、今はまだ先の話。

出逢うべくして出逢った2人から物語は紡がれる。

## 第2話

「還すわけないだろう?」

男の冷たい声が広間に響く。

「いやいや、私なぞ何の役にも立ちませんで。だから帰ります」

少女はぶんぶんと左右に首と両手を振る。

「そう言うな。ここは良い国だぞ?」

男は先程とはかけ離れた、見る者全てを魅了する微笑みを浮かべた。

「娘、と呼ぶのも他人行儀だな。名は何と言う?」

男は玉座を立つと、少女に歩み始めた。

少女の目の前に立った男は、見上げる程の長身だった。

さらりと腰まで伸びた真つ直ぐな薄い水色の髪。少女を見つめる瞳は切れ長の董色で、すつとした鼻筋に薄めの唇。

間近で見れば、余計に人間離れた美しさだった。

少女は思わず見惚れていた。が、我に返ると必死で言葉を探した。

「人に名を尋ねる時は、自分から名乗るのが常識でしょう!! そんな事もわかんないの?」

「重ね重ね陛下に何と言う暴言を!!」

男が反応を返す前に、周りに控えていた兵士達が色めき立つ。

「それは失礼を。我が名はセグナルタ・L・ラドヒューズと言う。

貴女の名を教えて頂けませんか、お嬢さん?」

ふわりとマントが翻り、目の前のセグナルタが片膝を付き、少女の左手を取り口付ける。

それは映画の中の騎士さながらに、厭味な程様になっていた。

少女は、かぁと顔に血液が集まったが、瞬時にセグナルタの思惑を理解すると、即座に左手を抜き取った。

「私は月岡琥珀<sup>つきおかこはく</sup>。琥珀でいいわ。だから私もセグって呼んでいい? 呼びにくいから」

男を睨み付けながら琥珀は答える。

「コハク、ね。呼び方はコハクの好きにすればいい」

聞き慣れないイントネーションでセグナルタは琥珀の名を呼ぶ。

「じゃあセグって呼ぶから。とにかく私、もう遅いから帰ります」

琥珀は後ろを振り返ると、扉に手を掛け思いつきり開けた。

しかし、目の前に広がるのは燭台しょくだいの灯りに照らされた、長い廊下だった。

「何で？」

琥珀は茫然と呟く。

「当たり前だ。道は閉じてる。やっと捕まえた獲物をそう易々と逃がすわけないだろう？」

厭味な美形が後ろで笑う。

——こいつ、王は王でも魔王だ。

琥珀はセグナルタの後ろに控える兵士達の殺気を感じ取り、心の中で呟いた。

「さあコハク、お前には色々と話さないといけない。こちらにおいて？」

セグナルタに手を引かれ、琥珀は連れていかれる。

ばたん、と後ろで閉じられた扉が自分の退路に思え、琥珀は覚悟を決めた。

琥珀が連れていかれた部屋は、セグナルタの執務室だった。

琥珀がふかふかのソファに座ると、セグナルタが本題に入った。

「コハクを召喚した理由はただ一つだ。竜の元へ行ってくれ」

事も無げにセグナルタは告げる。

「りゅうつ？」

琥珀はことごと首を傾ける。

「そう、竜だ」

再びセグナルタが告げる。何となく想像はつくが、まさかと思い聞き返す。

「りゅうつて？」

はあー、と長い溜め息が聞こえた。

「ドラゴンと言えはお前でも理解出来るか？」

どこまでも人を馬鹿にした態度でセグナルタは告げる。

「ドラゴンぐらいます！セグは私の事馬鹿にし過ぎー！」  
ぱんつと机に両手を付くと、目の前に座るセグナルタに身を乗り出す。

「ってドラゴン！？ドラゴンってあのドラゴン？」

琥珀だって竜がドラゴンくらい知っている。しかし、全て昔話や神話、伝説の中の生き物だった。

やっぱり、と心のどこかで思った。

「どのドラゴンかは知らんが、ドラゴンと言えはドラゴンだ」

再びセグナルタは深い溜め息を吐いた。

「とにかく、コハクには竜の元へ行つて欲しい」

「それって私に竜の生け贄になれて事？」

セグナルタに身を乗り出していた琥珀の顔が蒼白に変わる。

すると柔らかな男性の声が割って入った。

「陛下、その様な説明ではコハク様は混乱してしまわれます。私が説明しますから陛下は黙っていて下さい。コハク様、どうぞお座り下さい」

につこりと音がする程の笑顔で、これまた美形の男が告げた。

「私はクルトと申します。呼び方はコハク様のお好きにどうぞ。ク

ーでも何でもいいですよ。コハク様なら特別です。立場はこの国の宰相兼陛下のお守りですね」

クルトはにこにこ優しい笑顔で、とんでもない内容を語った。

「今この人、セグのお守りって言った？」

この人も油断ならないと思いながら琥珀は答える。

「いえ、クルトでいいです」

琥珀はクルトと名乗った男を見つめる。

クルトは耳より少し長い赤い髪に、眼鏡をかけた優しい風貌の男だった。身長はセグナルタより頭一つ分低い。

「さて、本題に入りますね。コハク様を召喚したのは、竜と我々との通訳と言いますか、橋渡し役になって頂きたいのです」

―頭、痛くなりそう。

琥珀はちくりと頭が痛み始めたのを感じた。

### 第3話

痛み始めた頭を押さえながら琥珀はクルトに問う。

「橋渡し役、ですか？」

はい、と笑顔でクルトは答える。

「このラドヒューズという国は竜の加護を受けています。竜の加護は1000年毎に結び直すのですが、その際竜と対話が出来る存在が必要なのです。元々、竜の声を聞く一族が存在したのですが、彼らは500年前にもう滅びているのです。その為、竜と対話出来る存在が必要だったのですが、その尊き存在がコハク様、貴女なのです」

淀みなく滑らかにクルトは告げる。

「何故私なんですか？」

琥珀は真っ直ぐにクルトを見つめ問う。

「黒を纏い、竜と波長が合う存在が巫女となり得ます。が、既にこの世界から黒を纏う<sup>まと</sup>一族は滅びています。なので異世界から召喚するしかありませんでした。そして選ばれたのが、コハク様だったのです」

クルトの説明はわかりやすかったが、琥珀には突然過ぎてなかなか受け入れられなかった。

困惑の色を浮かべる琥珀にクルトは告げる。

「突然の事でコハク様が困惑するのは理解しています。ですが、我が国にとって竜の加護を失う事は滅びに直結する事なのです。すぐには言いません。ゆっくりでいいので考えて頂けませんか？」

クルトの声はどこまでも優しい響きだった。

「実は、まだコハク様をお還しする方法がわからないのです。ですが、必ず見つけ出しますので、それまで色々この国について学びませんか？」

―私を帰す方法がわからない？

一瞬琥珀は何を言われたのかわからなかった。

「どういう事？」

琥珀の声から色が消えていた。

「セグが私の事召喚したんでしょ？帰れないって何で？」

「試しに召喚したら偶然出来たから。還す事なんて、私は考えてなかったからな。だが、私は我が国一番の魔術師でもある。だからコハクを還す方法は探そう」

セグナルタの声も淡々とした冷たい声だった。

「とにかく！とにかく今日はもう疲れたでしょう？コハク様の隣に控える者はリファといえます。コハク様の身の回りの世話を担当しますので、その者に何でも言ってお下さいね」

クルトが割って入り、琥珀はこれ以上の追及を諦めた。

いつの間にか、琥珀の座るソファの左後ろにメイドが一人控えていた。

「さあコハク様、お部屋に案内します。一緒に参りましょう」

リファと紹介されたメイドは、20歳くらいで琥珀より少し年上の女性だった。

ふわふわとした柔らかそうな桃色の髪に明るい黄緑の瞳、ぷっくりとした唇に白い肌。まるで妖精の様なリファの風貌に、琥珀は思わずリファの背中羽根がないか確認してしまった。

それほどにまでリファは可憐だった。

「好きです」

思い余ってリファに告白をした琥珀だったが、

「コハク様は面白い方ですね」

さらりと美しい笑顔で躲かわされた。

「やはりコハクは馬鹿だな」

無遠慮に琥珀の天敵の声が割って入る。

「セグは失礼この上ないよね」

につこりと琥珀はセグナルタに切り返す。

「コハク様、陛下や宰相殿に尋ねておきたい事はありませんか？な

ければそろそろお部屋に案内したいのですが」

おずおずと、リファが申し訳なさそうに琥珀に尋ねる。

「そうだなあ。その竜って肉食？人間食べる系だったりする？」

琥珀の唐突な質問に、琥珀を残し3人は一瞬固まった。

しかし一番最初に石化から解けたのはクルトだった。

「安心して下さい、コハク様。その竜は緑竜といって草食ですよ」  
優しい笑顔でクルトは告げた。

「例え肉食でも竜にも好みがあるから、お前は大丈夫だろ」

にやりと人の悪い魔王様の微笑みが返る。

琥珀は沸々とセグナルタに対する苛々が募り、思わず切り返した。

「セグは一度死ねばいいよ。そして、性格を矯正して蘇ればいい」  
徐々に琥珀のセグナルタに対する言葉使いは悪化していた。

「どうしてあの様な嘘をコハク様に告げたのですか？」

クルトは主にそつと尋ねた。

「真実は時に残酷だ。コハクに対して、この運命は決して甘くない。ならば少しでも憎んだり、感情をぶつける対象が身近にある方が楽だろう？私は阻めなかったのだから」

セグナルタの声は痛みを孕んでいた。沈黙が痛い程に空間を占める。

「クルト、早急にジルハの一族を呼べ」

しかし、再び響いたセグナルタの声に迷いはなかった。

## 第4話

翌日、目を覚ました琥珀は一瞬自分がどこに居るのかわからなかった。

「お目覚めですか、コハク様。おはようございます。朝食をお持ちしました」

リファの声が降ってきて、琥珀は昨日からの自分の状況を思い出した。

「おはよう、リファ」

にこりとリファに挨拶を返す。

「コハク様、しつかりと食べて下さいね。今日から猛勉強です」  
ふわりとした笑顔でリファはとんでもない事を告げた。

そしてリファの告げた通り、その日から色々な知識を詰め込まれた。ラドヒューズの歴史や法律、竜に関する知識や簡単な護身術にこの世界の文字、王族の系譜や王宮での礼儀作法、王妃としての心構え。「ちよつと待てえー！！後半の勉強おかしくない？明らかにおかしいでしょ！？」

ばたんつ、と勢いよく執務室の扉が開かれると同時に、琥珀が怒鳴り込んで来た。琥珀の勉強が始まって既に二週間が経っていた。

「うるさい。騒音だ。それに何の事だ？」

セグナルタは不機嫌さを隠そうとせず、コハクを睨み付けた。それは氷の様に冷たい眼差しだった。

「いえ、あのですねセグナルタさん。私、明らかに花嫁修業をさせられてる気がするのですが・・・」

おずおずとコハクはセグナルタに話し掛ける。

「ああ、それは私の作ったプログラムですよ」

にこにこさりと、セグナルタの隣に控えていたクルトが告げる。

「前に話した通り、まだコハク様をお還しする方法は見つからないのです。だからその間に色々覚えちゃいましょう？損はしませんよ」

？」

有無を言わせぬ笑顔でクルトが詰め寄る。

「クルト、お前はコハクに何を学ばせてるんだ？」

天の助けとばかりにグッドタイミングでセグナルタが問う。

琥珀はセグナルタに対する好感度が1上がった。

「歴史や文字ですよ。あとは礼儀作法や王族の系譜、王妃としての心構えでしょうか」

ひくりとセグナルタの口が引きつった。

「コハクも言った通り、明らかに後者はおかしいだろう？今すぐ止めさせる」

引きつった顔でセグナルタが命じる。

「無理です。この件に関する権限は陛下にないので。これは私の独断と偏見で選んだプログラムです。何か文句はございますか？お二方」

いつもと変わらぬクルトの笑顔だったが、セグナルタと琥珀はクルトの背後に得体の知れない何かを感じた。

「いえ、ございません。クルト様」

二人の返事は見事に重なった。

琥珀は、セグナルタとクルトの力関係を垣間見た気がした。

琥珀が召喚されて、ひと月が経った。琥珀は少しずつラドヒューズの歴史や文字、そして不本意ながらも礼儀作法や王妃の心構えなどを学んでいた。

そして理解したのは、この国がどれほど迄に竜の加護による恩恵を受けているのかだった。

緑豊かな山々、豊かに作物が実る田畑、壮大に流れる透き通った川。人々の平和な暮らしは竜がもたらしていた。

竜の加護が、他国の侵攻を許さない鉄壁の護りだった。

そして琥珀には、新たに身边警護の近衛兵、ソルが付いた。

ソルはひまわりの様なオレンジの短髪、水色の目をした22歳の長身の男だ。三白眼の為怖い印象を受けたが、話してみると気さくな

お兄ちゃんだった。

ソルが警護に付いてくれる様になり、琥珀はソルとリファと共に何度か城下町に下りる事もあった。そして何故か直接話すことは許されなかったが、町の人々の幸せそうな笑顔に触れる度に、少しずつラドヒューズを好きになっていった。

## 第5話

琥珀が勉強の合間、息抜きがてらに何度か訪れたセグナルタの執務室では、セグナルタとクルト、そして灰色のローブの人が難しそうな話をしていた。

琥珀が訪れるとクルトが紅茶とお菓子を用意してくれる為、最近ではセグナルタの執務室を訪れるのが琥珀の日課になっていた。

「お前は今日も来たのか」

琥珀を迎えたのは厭いやそうなセグナルタの声だった。

今日は珍しく、執務室にはセグナルタ一人だった。

「いいでしょ？息抜きなの！あれ？クルトは？」

琥珀はセグナルタの態度を無視して、客人用のソファに腰掛ける。

「あいにくクルトは席を外している。少しすれば戻って来るだろう」

琥珀を見る事もせずに、セグナルタが答える。

琥珀はじつくりとセグナルタを観察する。

――黙っていれば、凄く綺麗な人なだけだなあ。

後ろの窓から差す太陽の光を受け、キラキラとセグナルタの髪が光っていた。

――人間離れた美形なのに中身がやっぱり残念だなあ。

琥珀は黙々と自分の世界で考えに耽ひたっていた。

「コハク。お前今、失礼な事考えてなかったか？」

冷たいセグナルタの声に琥珀が現実に戻ってみると、絶対零度の魔王の微笑みが自分を捕らえていた。

「いえいえ、滅相もございません！！」

必死で否定をする琥珀を、セグナルタは胡乱うろんげな眼差しで見つめる。が、諦めたのか、琥珀に話し掛ける。

「まあいい。それよりもお前を教えている者達が褒めていた。コハクは理解力が高いと。真面目に学んでいる様だな」

不意に見せたセグナルタの笑顔は、琥珀がこの世界に来て初めて見

る含みのない優しい笑顔だった。

「セグが笑った・・・」

琥珀は呆然と呟いた。

「そりゃあ笑うでしょう。アレ、いえ、陛下も人間ですので」

いつの間にかクルトが帰ってきていた。用意周到に、いつもの紅茶とお菓子と共に。

「クルト、お前今、私の事をアレと言い掛けなかったか？」

さっきの笑顔が幻だったかの様な冷たい眼差しでセグナルタが問う。

「いやだなあ、陛下。言葉の文あやですよ」

にこにこと人畜無害な微笑みでクルトが答える。

―何故だろう。部屋が寒い。

クルトには逆らわない様にしようと、改めて琥珀は思った。

「さて、陛下で遊ぶのはこれくらいにしてお茶にしましょうか、コハク様」

手際よく、クルトが準備をする。

「ほら、陛下もいじけてないで。お茶にしますよ」

渋々とセグナルタも琥珀の向かい側のソファに座り、お茶会が始まった。

毎日繰り返される何気ないこの一時が、いつの間にか琥珀にとって掛け替えのない時間に変わっていた。

琥珀がいつもの様にセグナルタの執務室に向かうと、いつも見る灰色のローブを纏った男と鉢合わせた。

「陛下、では私はこれで失礼します」

男は琥珀にもぺこりと頭を下げると、足早に去って行った。

「来たな、騒音」

今日も厭そうにセグナルタは琥珀を迎える。

「だから、セグは失礼この上ないよね！」

最早それは二人の挨拶と化していた。

「前から気になっていたんだけど、あの灰色のローブの人は誰なの

？」

琥珀は我が物顔でソファの指定席に腰掛けると、セグナルタに尋ねた。

「随分遅い質問だな。もっと早くに聞かれると思っていたがな」

にやりと人の悪い顔でセグナルタが笑う。

「聞くタイミングが掴めなかったただけ！！」

むきになって琥珀が言い返す。

「まあまあコハク様、落ち着いて下さい。彼はジルハの一族ですよ」  
いつもの様にお茶菓子と一緒にクルトがやってくる。

「ジルハ？」

それなりにこの国の勉強はしてきた琥珀だったが、まだ聞いた事のない名前だった。

「はい。ジルハは由緒ある魔術師の一族です。もう習ったでしょうが、この世界の人間には魔力を持って生まれる者が多くいます。中でも、特に強い魔力を秘めた者が生まれやすいのがジルハの一族なんですよ」

改めて魔力とか聞くと、ここは異世界なんだな、と琥珀は実感した。にこにこ微笑みを絶やさずにクルトの話は続く。

「陛下はジルハの一族と共にコハク様の帰還方法を探しているのですよ」

「本当に？」

琥珀の顔がぱあっと明るくなる。

「はい。ですがまだ見つかってないのが現状です。幾分高度な魔術ですので」

申し訳なさそうにクルトが謝る。

「でもセグは一生懸命探してくれているのでしょう？なら謝る必要はないわ」

優しい声で琥珀が笑う。

「心配するな、必ず還してやるから」

何故かセグナルタの声が心強く感じた。

「お姫様、お迎えに上がりましたよ」

軽いノックと共にソルが現れる。

「次の講義が控えてるんで、部屋帰りますよ」

「ありがとう、ソル！」

琥珀は時間を確認すると帰る準備を始める。

「じゃあまたねセグ、クルト」

ぱたりと扉は閉ざされ琥珀は帰って行った。

「それで方法は見つかりそうですか？」

先程までとは違う雰囲気を纏いクルトが尋ねる。

「いや、難しいな。さすがだな、そう易々と逃してはくれんらしい」

セグナルタのそれは、悔しさを滲ませた声だった。

## 第6話

それは突然訪れた。

「貴女ね？陛下を誑かしている小娘は」

琥珀がソルと共に王宮の廊下を歩いていると、突然後ろから声を掛けられた。

振り向くと、20代前半の綺麗に着飾った女性がこちらを睨んでいた。

それはレモン色の真っ直ぐな髪をした、色白で大きな青の目をした綺麗な女性だった。

虚を衝かれ、一瞬返答が遅れた琥珀に畳み掛ける様に女が続ける。

「あんたなんて、陛下の事何も知らないくせに！絶対に私は負けないわ！色付きのあんたなんかに！！」

言いたいだけ言って満足したのか、女は早々に立ち去った。

「何だったのかな、あの人」

呆氣に取られた琥珀が尋ねる。

「いや、姫様が気にする事はねえよ。大方陛下に振られた逆恨みでしょ」

ぽんぽんと軽く頭を撫でて、ソルが励ます。

「セグの事何も知らないくせにかあ。確かに私、セグの事何も知らないなあ」

自分で言って、琥珀は少し落ち込む。

「ソルから見たセグってどんな王様なの？」

隣に佇むソルを見上げる。

「俺から見た陛下？そうだなあ、国民に慕われる賢王ってところ？あの人、頭良いし臆服しないし強いし、本当出来た人だよ。何より俺達国民の事を本当に大切に想ってくれている。自慢の国王だよ。だから当然女にもてるかな、相手にしてないけどね」

淀みなくすらすらと話すソルが、どこか誇らしげに見えた。

琥珀は、ここに来て2ヶ月近くが経つのに、本当に自分はセグナルタの事を知ろうとしてなかったんだと改めて思った。

最初はセグナルタなんて大っ嫌いだったが、毎日少しずつ触れ合う度に少しずつ好意は増していた。

決して恋愛対象として好きではないが、もう少し歩み寄ってみようと琥珀は決意した。

「あと、さっきの人他にも何か言ってたよね。ソル、覚えてる？」

琥珀は何か聞き慣れない言葉を言われた気がするが、何かは思い出せなかった。

「思い出せないなら大した事じゃないって事です。さあ、陛下が待ってるかもしれないから行きますよ、お姫様」

どこか誤魔化された気がしたが、ソルに促され琥珀は執務室に向かった。

そして早速琥珀は決意を態度で表した。

「セグは趣味って何？」

「は？」

唐突な琥珀の質問にセグナルタは呆気にとられた顔をした。

「何か悪い物でも食べたか？」

琥珀はセグナルタから可哀想な目で見られた。

「セグはやっぱり私に対して失礼だよ！」

琥珀はぎろりとセグナルタを睨んだ。

「いや、唐突過ぎて驚いただけだ。質問の答えだが、私に趣味はない。そんな時間がないからな」

事も無げにセグナルタは話す。

「私はこの国の王だ。国民が健やかに暮らす国を作る義務がある」  
王の鑑の様な模範解答だった。しかし、綺麗過ぎるその解答は琥珀を悲しくさせた。

「セグだって一人の人間なのに。」

セグナルタがどれだけの重責を担う立場なのかを改めて痛感した。

「セグはそれで辛くないの？ちゃんと癒しはあるの？」

琥珀の必死の問い掛けに、セグナルタは少しだけ哀しみを秘めた瞳で告げた。

「そんな事、考えた事も無かった」

その夜、ソルがセグナルタの執務室を訪れた。

「陛下、ルードの娘がコハク様に禁句を使いました。コハク様は気にはしていませんが、用心した方がよいかと」  
いつもとは違う口調でソルが報告をする。

「あの女か。クルト、二度と登城出来ぬ様に手配しておけ。ソル、ご苦労だった。引き続きコハクの警護を頼む」

「はっ！」

ソルが去った後セグナルタは深々と溜息を吐いた。

「もうそんなに誤魔化せなくなっているな」

憔悴したセグナルタを心配そうにクルトが見つめていた。

## 第7話

その日から、琥珀はあの哀しい目をしたセグナルタの顔が頭から離れなかった。

自覚症状は無かったが、目がセグナルタを追っていた。

「姫様最近元気ないね？」

ソルが心配そうに問い掛ける。

ううん大丈夫、と笑う顔がソルにはどこか痛々しかった。

そしてそれを見ていたリファも何も出来ない自分が齒痒かった。

セグナルタは15歳で即位した。それから毎日、国の為に生きてきた。

セグナルタは第一継承権を持つ王子だった為、幼少時から国民の為に生きる事が余儀なくされていた。

帝王学や武術、社交性を身に付ける為のパーティー出席。

毎日が学ぶ事だらけで、趣味を見つける時間なんて無かった。

それを疑問に思う事など許されなかった。

セグナルタが王として歩んできた歳月を知り、琥珀は心が痛んだ。

「コハク様は優しいですね。あんなに陛下を嫌ってらしたのに」

クルトが優しく微笑む。

「今は嫌ってないもん」

琥珀は小さく反論する。

「ええ、知ってますよ。コハク様、陛下を不幸とお思いですか？」

クルトのそれはいつもと変わらない口調だった。

「だって辛い事を辛いとわからないのは、哀しい事だと思う」

琥珀の黒い瞳が滲<sup>にじ</sup>んでいた。

「それでも陛下は幸せだと思いますよ。理由は本人に聞いて下さい」  
クルトが喋り終わると同時に、ボタンと執務室の扉が開きセグナル

タが現れた。

「コハク、来てたのか。最近元気がないとソルが心配してたぞ。また変な物でも食べたか？」

にやりといつもと変わらない笑顔でセグナルタが問い掛ける。

「だからセグは失礼極まりない！！」

反論しながらも琥珀は、少なくともセグナルタはいつもと変わらないそうだと安心した。

「コハク、近いうちに竜の元に向かう事になるかもしれない。心構えをしておいてくれ」

そこには先程までとは打って変わる、真剣な表情のセグナルタが居た。

丁度ソルが迎えに来て、それ以上詳しい話は聞けなかった。

「では陛下、やはりこれ以上の猶予は無いのですか？」

クルトが沈痛な表情を浮かべる。

「既に国民に被害が出始めているらしい。元老院はこれ以上待てないそうだ」

セグナルタの声にも悔しさが滲む。

「我々はこの暮らしに慣れ過ぎたのだろうな。その為の犠牲を見ない振りをして」

そしてしばらく沈黙が続いた。

「クルト、ナイディルを呼んでくれ」

セグナルタは、どこか決意を秘めた目をしていた。

「俺は何としても阻んでやる」

小さな声は誰にも拾われる事はなかった。

翌日、琥珀の部屋にセグナルタが訪ねてきた。

「コハク、突然だがしばらく私は城を離れる。もしかしたらお前の

出立に間に合わないかもしれない」

セグナルタの出立ちは、既に旅装束になっていた。

「どこかに行くの？王様なのに？」

琥珀は少し嫌な予感がした。

「ああ、行かなければならない場所が出来た。執務は既に任せてきた。だからしばらく俺が居なくても問題は無い。心配するな」

セグナルタが珍しく柔らかい笑顔で答える。

では行ってくる、とセグナルタが背中を見せる。

何か言いたいのに、言わなければいけないと思うのに、琥珀は言葉が思い浮かばなかった。

扉に手を掛けたセグナルタが一度だけ振り返る。

「コハク、俺の名前、覚えているか？」

それは突然の質問だった。

「セグナルタ・L・ラドヒューズでしょ？」

琥珀は得意気に答える。

「ああそうだ。だが、コハクには特別に正式名を教えてやる。俺の名は、セグナルタ・リヒト・ラドヒューズ。誰にも言うなよ？」

にやりとセグナルタが笑う。

「コハク、真実は時に残酷だ」

「え？」

琥珀は真顔になったセグナルタの突然の言葉に戸惑う。

「でも必ず護るから」

バタンと扉が閉じられると同時に投げ掛けられた言葉を、無情にも

琥珀は聞き取れなかった。

「何？セグ！よく聞こえなかった！」

琥珀は急いで扉を開けたが、セグナルタの姿はもうなかった。

「真実は時に残酷？」

琥珀がこの意味を知る時は、既に目の前まで迫っていた。

## 第8話

セグナルタが旅立って一週間が経った。

「今日も来たのかい？コハク。残念ながら兄上はまだ帰ってないよ」  
セグナルタの執務室に行くと、弟のナイデイルが優しく迎えてくれた。

あの日からナイデイルが執務を肩代わりしているらしい。

ナイデイルはセグナルタより少し濃い水色の髪で、長さは肩あたりで揃えられており、目は深い緑色、顔立ちはセグナルタとほとんど同じなのに、優しい目元が雰囲気を柔らかくしていた。

「そっか。まだ帰ってないんだ」

琥珀はあれから毎日執務室を訪れていた。

けれど一向にセグナルタの情報は得られなかった。

「コハク様、どうぞ」

クルトに促され琥珀はいつもの指定席に腰を下ろすと、今日もクルトはお茶を用意してくれていた。

そして、琥珀が紅茶に口を付けた時だった。

「殿下、宰相、緊急事態です。陛下の玉の光が赤い明滅を始めました」

ボタンと勢い良く扉が開くと同時に一人の兵士が慌ただしく部屋に入ってきた。

兵士の報告を受けたナイデイルとクルトの顔がざつと青ざめた。

琥珀は2人の様子から、ただ事ではないのを感じ取った。

「何？どういう事？何が起こったの？陛下ってセグの事でしょ？」  
嫌な予感に琥珀は必死でクルトに掴み掛かる。しかしクルトは顔を背けるだけで、口を開こうとはしなかった。

「ねえ！ナイデイル！！教えてよ！！」

それは痛みを伴う必死の叫びだった。

しかしナイデイルは色の無い瞳で琥珀を見据えるとゆっくり口を開

いた。

「クルト、コハクを連れて行こう」

それは冷静な声だった。意味が分からず、琥珀はナイデイルを見つめる。

「しかしそれでは陛下との約束が！」

クルトがナイデイルに詰め寄った。

琥珀はクルトの只ならぬ様子に不安が募る。

「兄上の交渉が決裂したから、兄上の玉は明滅を始めたのだろう。だったらコハクを連れて行かないと事態は動かない。悪化するだけだ」

ナイデイルの冷たい瞳が琥珀を貫く。

「コハク、兄上やクルト達は貴女に偽りを述べた」

「え？」

突然の告白に琥珀は戸惑う。

「ナイデイル殿下！！」

クルトが必死に止めようと声を荒げる。

「貴女は人身御供<sup>ひんみこ</sup>として召喚されたのですよ。つまり生け贄です」

ナイデイルによって淡々と語られる言葉は、現実とかけ離れて思えた。

琥珀は何を言われたのか理解出来ずに呆然とナイデイルを見つめた。  
「・・・、人身・御・供？ 竜との橋渡し役じゃなかったの？ 生け贄なの？」

ようやく口に出た言葉だったが、その衝撃に琥珀の声が震える。

「そんなの嘘に決まってるでしょう？ まさか本当に信じていたんですか？ 貴女が犠牲になってくれれば、我が国は向こう1000年は安泰なんです。心配しなくても殺されはしません。竜の花嫁になるだけです？ だから竜の元に行って下さいますよね？」

ナイデイルのその声はセグナルタとは似ても似つかないほどに冷たい無機質なものであった。

セグナルタも冷たい声を出す、それでも琥珀には恐れを感じさせ

ないものだった。しかしナイデイルは違う。

その無機質で冷たい声は、琥珀に意思を問いながらも拒絶を許さない。

セグナルタに似ていると思った顔が一瞬で見知らぬ人間に変わった。

―花嫁？何それ……。

琥珀は、ナイデイルが告げた内容が理解出来なかった。

「……様。コハク様！真実を話します。一旦お部屋に戻りましょう？そちらで全てお話しますので」

琥珀はクルトに促されるまま、ソルと共に部屋に戻った。

「どういう事？私が生け贄って本当なの？セグやクルト達は嘘を付いたの？」

琥珀の怒りを秘めた声が室内に響く。

「全てお話します。長くなりますが、聞いて頂けますか？」

クルトの声もまた、疲れを孕んでいた。

それは遙か昔の物語。

まだラドヒューズと言う国名が地図上に存在しなかった頃、一匹の竜がこの地に降り立った。

この地では豊かな土壌と資源を巡り、昔から他国の侵略による争いが続けられていた。

争いに疲弊していた人々に竜は告げる。

『黒を纏う娘を我に捧げよ。さすれば我がこの地を護ろう。しかし1000年で我の護りは切れる。1000年毎に我が一族は求めよう、黒き聖なる娘を』

それを受け、一つの一族が名乗りを挙げる。

彼らはタバルの一族。『色付き』と人々から蔑まれた黒を纏う一族だった。

それから数千年間、竜と一族との約定は果たされてきた。

しかし500年程前に突然タバルの一族が滅びた。未だに原因は不

明だが、大きな炎に包まれて村は一夜で灰と化した。

そして26年前に、甚大な魔力を秘めた王子が誕生した。

彼の才能はどの魔術師よりも突出しており、将来を期待されながら健やかに成長し、そして10歳の誕生日を境に予知能力に目醒める。その能力により、彼は近い未来に約定の年を迎えると同時に、異世界から黒を纏う娘が竜により召喚される事を知る。

彼は自国の平和がタバルの一族の犠牲の上に成り立っていた事を憂いていた。

今は既にないたバルの一族が歩んできた歴史を知っていた。

滅びの道を辿った真相も知っていた。

同じ国民でありながら、目と髪が黒いと言っただけ彼らは蔑まれ、虐げられてきた。

不吉な黒を纏う『色付き』と。

しかし人々は竜が『色付き』を所望した事により、黒と言う色を蔑みながらも高貴な色とした。

そして同時に怖れた。自分の血筋に『色付き』が出る事を。

彼はその様な責を異世界の娘に負わす気はなかった。彼は必死で阻止を企むが、相手は人外の生き物、ましてや膨大な魔力を持つ竜だ。彼の努力も虚しく、召喚は実行された。

しかし彼も何も手を打っていない訳ではなかった。

彼は召喚された異世界の娘がラドヒューズ城に現れる様に細工をした。

そして、召喚は成され琥珀はラドヒューズ城に召喚された。

## 第9話

「何それ・・・」

琥珀はクルトの話した事が理解出来なかった。いや、したくなかったのかもしれない。

「私は竜に召喚されたの？セグじゃなくて？」

あの日、自分はどれだけセグナルタを責めたのだろう。

「だってセグは否定しなかったよ？」

そしてどれだけ傷付けたのだろう。

「セグは必死で助けようとしていてくれたの？」

かくん、と琥珀はその場に崩折れた。リファがそつと支えてくれた。

『コハク、真実は時に残酷だ』

―セグが言っていたのは、こういう事だったの？

ポタリと絨毯に水滴が落ちた。

「恨んだり憎んだりする対象が、感情をぶつける対象が身近に居る方がいいだろう、と。陛下はいつも憂いておりました。いつか現れる異世界の娘が、何故我が国の犠牲になる必要があるのか。何故タルの一族の犠牲を誰も疑問に思わなかったのか。それは本来王族が担うべき責ではないのか、と」

クルトの声が小さく震えていた。

「コハク様、陛下は貴女が現れたあの日から必死でコハク様の帰還方法を探していたのです。ですが、竜は貴女が自分の元に現れない事に苛立ち始め、ついに強行手段に出ました。実は今、我が国は竜の加護を失いつつあります。地方の地域から被害が報告され、元老院も動き始めこれ以上引き延ばせないと判断した陛下は、単身竜の元に向かいました。命を失う事も覚悟して」

琥珀はあの日、セグナルタは別れの挨拶に来てくれたのだと唐突に理解した。

「陛下は何としてもコハク様だけは還したいと仰っていました。」

コハク様、もしかして陛下は正式名をコハク様にお告げになりませんでしたか？」

『コハクには特別に正式名を教えてやる。俺の名は、セグナルタ・リヒト・ラドヒューズ。誰にも言うなよ？』

「教えてくれた。誰にも言うなよって」

やはり、とクルトは思った。

「コハク様、王族の者は自分のミドルネームを生涯の伴侶と決めた者にしか教えません。それほどにまで大切な名前なのです。やはり陛下はコハク様を選ばれたんですね。陛下は自分の魂をコハク様に捧げたのです」

今までわからなかったセグナルタの優しさが痛い程に胸に広がる。彼はずつと守ってくれていたのだ。竜から、周囲の目から、過酷な運命から。

それは、自分の命を懸けるまでに。

「どうして……。どうしてセグはここまで私の事を？」

初めての出逢いは最悪だった。馬鹿にされ、貶されて。でも、今なら分かる。きっと自分は一目惚れしたのだ。

立派な玉座に腰掛けた、神々しいほど美しい人に。

だから馬鹿にされ貶されて悔しかった。傷付いた自分を隠すのに必死で、だから彼に憎まれ口を叩いた。

優しさを優しさで分かせない本当に優しい人。

「私、セグに会いたい。会わなきゃ！だってお礼も何も伝えてない！！」

泣いている場合ではないと琥珀は顔を上げる。

「クルト、私をセグの所に連れて行って」

決意を秘めた琥珀の目を見て、クルトは諦めた様に溜息を吐いた。

「陛下はコハク様が犠牲にならない様に、単身竜の元に向かったのです。そして陛下の命は消えかけています。それでもですか？」

セグナルタが命を懸けて護ろうとしてくれたなら、今度は自分が護る番だ。

「もちろんよ」

迷いのない琥珀の笑顔はとても綺麗だった。

## 第10話（前書き）

今回、残酷な表現が出てきますのでご注意ください。

## 第10話

琥珀はクルトとソル、そして数人の兵士達と共に竜の元に向かった。そして3日目にその場所が見えてきた。

クルトの手には玉が握られており赤く明滅していたが、少しずつその間隔は伸びていた。

クルトからの説明によると、王族には各々に自分の玉が与えられ、それは本人の身体状況を反映するらしい。

通常状態の玉は本人の色を反映する。セグナルタは優しく心温まる様な董色だ。

しかし主人の命が危ぶまれている時、玉は赤い明滅を始める。最初は激しく、そして命が尽きる様に間隔は長くなり終には血の様に赤く染まる。

そして数時間赤く染まった玉は最終的に透明になる。玉の色が透明に変わる事は主人の死を意味する。

セグナルタの玉も既に明滅の間隔は長くなり、命が尽きるのも時間の問題と思われた。

間隔が長くなる玉を見る度に、琥珀は焦った。間に合わないかもしれないと。

辿り着いたそこは、豊かな緑が息づく雄大な森だった。

そこは開けた場所で美しい小さな泉があり、畔には樹齡数千年の一本の巨木が木陰を作り、色とりどりの花が咲き乱れていた。

それはとても幻想的な風景だった。巨木の後ろに見える異質な洞窟を除いて。

その洞窟からは異様な空気が流れていた。

ぽつかりと大きく開いた入り口から奥は見えず、暗闇に包まれていた。

「ここだよね？」

琥珀はごくりと唾を飲み込む。

「コハク様、大して効果は得られないかも知れませんが、これを被っていて下さい」

クルトから濃い緑色のマントを渡された。それは琥珀がリファ達と街に行くときにいつも渡されていたフード付きのマントだった。

「無駄かも知れませんが、色を隠す為ですよ」

柔らかにクルトが笑う。

「ありがとう、クルト」

琥珀は一步を踏み出した。少しすると、入り口の光は届かなくなり暗闇に変わる。

するとクルトが松明を掲げ光が生まれる。しかしよく見ると灯りをもたらししているのは炎ではなかった。

「私も少しなら魔力がありますので。陛下の足下にも及びませんがね」

恥ずかしそうにクルトが笑う。

先頭をソルとクルトが務め、15分ほど歩くと突然開けた場所に出た。

そこは上が一部空洞になっており、生い茂った蔦の隙間から優しい太陽の光が降り注ぎ、空間を優しく照らしていた。

幻想的なその空間に竜は存在した。

何者も寄せ付けない白い鱗、目は光輝く金、鋭く伸びた爪。

姿は物語で見た西洋の竜そのものなのに、放たれる威圧感に肌を痛い程刺さってくる。

琥珀は美しいと感じると同時に、正直恐ろしいとも感じた。

それは初めて見るモノに対しての畏怖だった。

《何用だ、人間よ。我が花嫁でも連れて来たか？》

重々しいそれは直接頭の中に響いた。

クルトに視線を合わすと彼にも聞こえたらしく、ごくりと頷いた。

「私達は王を返して貰う為に来ました」

クルトが一步前に出る。そして彼は深々と頭を垂れた。

『コハク様はギリギリまで何もしないで下さい。貴女が花嫁とばれたら陛下の努力が無駄になります』

琥珀は事前にクルトから告げられた通り、事態を見守る事にした。

《お前達の王とは、あの脆弱な人間か？》

竜が尾を動かした先に、赤い色が広がっていた。

それは石の壁に叩きつけられたのか血溜まりに横たわり、右肩から左脇腹にかけて大きく抉られた爪痕を残したセグナルタの変わり果てた姿だった。

全員が目の前に広がる光景を受け入れられなかった。

どくり、と琥珀の心臓が大きく鼓動をした。

「セ・グ・・・セグ！！！」

琥珀はマントのフードが落ちるのも構わずに、セグナルタに駆け寄った。

血溜まりから抱き上げたセグナルタの顔色は血の気を失い、蒼いを通り越して既に白く、美しく艶のあった水色の髪は赤い血の色を吸っていた。

無惨に抉られた胸の傷からは、まだ血が流れていた。

あの日、琥珀を真っ直ぐに見つめてきた董色の瞳は深く閉ざされていた。

「どうして・・・？」

小さく震えるその声は自分の声のはずなのに、何故か琥珀には届かなかった。

## 第11話

多分、セグナルタは必死で竜を説得しようとしてくれた。

しかし相手がそれを受け入れる事はなく、その結果鋭い爪の生えた腕で壁面に叩きつけられたのだろう。

血溜まりがその衝撃を物語っていた。

しかし絶望的なその状態で、微かに感じられる呼吸が唯一セグナルタの生存を証明していた。

《ああ、やはり花嫁を連れて来たのだな。待ち侘びたぞ、我が花嫁よ》

竜の金色の目が琥珀を捕える。

その目は琥珀しか映しておらず、異様に思えた。

「姫さん、陛下抱いて下がってろ！」

ソルと兵士達が竜と琥珀の間で剣を構える。が、兵士達の目には明らかに怯えが走っていた。

それでも竜はソル達の事など、視界に入らないかの様に振る舞う。

《しかしこの姿では花嫁を怖がらせてしまうな》

瞬間辺りは白い光に包まれる。

そして一同が目を開けると、竜の居た場所に12・13歳程の少年が居た。

少年は真っ白な髪で肌も異様に白く、瞳は金色だった。美しく整った容姿が何故か琥珀には恐ろしく感じた。

「花嫁、我は父から聞いた黒き娘をずっと待ち侘びてきた。やっと貴女が手に入る」

人型を取った竜は、ソル達の剣など物ともせずに琥珀に歩み寄る。

「邪魔だ」

たった一言だった。

竜が左腕で薙ぎ払うとソルと兵士達が吹き飛び、壁に叩きつけられた。

「コハク様は貴方の花嫁になどありません」

ソル達が一瞬でやられた事に動揺しながらも、クルトが琥珀とセグナルタを庇う様に立ちはだかった。

「お前も邪魔だ」

同じ様に竜はクルトも左腕で軽く吹き飛ばした。

もはや竜と琥珀の間には、何も守ってくれるものはなくなった。

目の前まで迫った少年を見上げ、琥珀の身体にカタカタと震えが走る。

琥珀より小さな少年にしか見えないソレは、確かに人外の生き物だった。

肌を刺す異様な空気が、真っ直ぐに琥珀を捉えた無機質な金色の目が、見るものを畏縮させる凄烈な雰囲気<sup>せいれつ</sup>が、全てが琥珀にとって恐怖に変わった。

無意識にセグナルタを抱きしめる手に力が加わる。

「さあ、我が花嫁よ。その様な死に損ないなど捨て置いて、我と共に永劫<sup>えいこく</sup>の刻<sup>とき</sup>を生きよう」

冷たい微笑みと共に、琥珀の頬に竜の右手が伸ばされる。

恐怖に固まった琥珀は強く目を瞑った。

「嫌だ、嫌だ、嫌だ——！！」

瞬間、パシんつと小さく何かが弾かれる音を聞いた。

琥珀が驚いて目を開けると、目の前に薄い透明の壁が張られ、伸ばされていた竜の右手から煙が上がっていた。

「おのれ、人間！まだ邪魔をするか！」

竜の声が憎々しいものに変わる。

「コ・ハク・は、あな・た・に・は・渡さ・ない！」

確かに閉じられていた董色の瞳が、優しい光を湛え開いていた。

「セグ——！」

セグナルタが小さく笑った気がした。

「コ・ハク、こ……の結・界は……長く……は……保たない。だから……」

「ら・俺の・名・を呼・べ」

洞窟に響くセグナルタの声が苦しみを孕んでいる。

「セグの名前？」

こくりとセグナルタが頷く。

「セグナルタ・リヒト・ラドヒューズ」

促されるまま琥珀がセグナルタの名を告げると、ゆっくりとセグナルタが左手を琥珀の頬に添える。

それは力が入らないのか、震えていた。

「俺・の・名を・貴女・に・捧げよ・う。コハク・ツキオカ」

セグナルタが言葉を告げると同時に空間が淡い光に包まれる。

光が収まると、琥珀の左手の甲に紋章が浮かび上がっていた。

「こ・れ・で、コ・ハク・は・けっ・し・て・あな・た・の・はな・よ・め・に・な・ら・な・」

ぱたりとセグナルタの左腕が投げ出される。再び瞳も閉じられていた。

琥珀はパニック状態になりそうだったが、必死で押さえた。何が起ったのか理解出来ない今、まだ多分事態は好転していない。

「おのれ、人間の王！よくも不滅の契約を！！」  
憎々しげに竜が叫ぶ。

琥珀にはセグナルタが施した契約の意味が分からなかった。

「コハク様、それは互いに名を告げる事により発生する不滅の契約です。その契約によりコハク様は陛下の伴侶になられたのです。魔力が支配するこの世界では、例え竜でもその契約印を持つ者を伴侶には出来ません」

意識を取り戻したクルトが琥珀に説明をする。

「それってつまり私はセグの奥さんって事？」

クルトが優しく微笑む。

「陛下の奥方が生涯コハク様になっただけです。コハク様は何一つ縛られませんよ」

琥珀は魔力を持たない。つまりこの世界の理には縛られない。  
それは琥珀が日本に戻っても紋章は消えないが、普通に結婚が出来  
るとクルトは告げていた。

## 第12話

琥珀はセグナルタの優しさを改めて実感した。

―早く助けなきゃ！

膝に抱えたセグナルタの身体を抱き締める。

琥珀はセグナルタの少しずつ失われる体温が、止まる気配のない血が、遂に赤く染まった玉が、全てが恐ろしかった。

「仕方ない。新しい花嫁を召喚しよう」

冷たい感情の籠もらない声が響き、事もなげに目の前の竜は魔法陣を出現させた。

琥珀は彼が何を言ったのか理解出来なかった。

あの日琥珀は、いつもと何ら変わらない日常が一瞬で奪われた。いつもの様に部屋で寝て、お母さんに起こされて、友達と話ながら学校に向かう。

そんな明日が待っているはずだった。

それを、目の前の相手の勝手な理由で平然と奪われた。

琥珀は、ふつふつと怒りが湧いてくるのを感じた。

それは今まで竜に感じていた恐怖など、一気に吹き飛ばした。

―ごめん、セグ。必ず助けるから、ちょっと待ってて。

琥珀はセグナルタをそつと横たえると、竜に近付いた。

「待ちなさいよ」

それは怒りを秘めた低い声だった。

そんな琥珀を気にも止めず、竜は黙々と召喚の準備を進めている。

「待ってて言ってるのが聞こえないの？」

琥珀はガシツッと竜の右腕を掴み、自分の方に向かせた。

竜の冷たい金色の瞳が琥珀を見据える。

「今すぐ止めなさい！」

琥珀は怯<sup>ひる</sup>む事なく竜を睨み返す。

「そなたには関係ないだろう？」

鬱陶しいとばかりに淡々と竜は答える。

「関係ない？ふざけんじやないわよ！あんたに召喚される人間の日常や家族、友人を勝手に奪う権利があるの！？ある日突然知らない世界に連れて来られて、竜の花嫁になれなんて冗談じゃないわ！！そんなの私だけで充分よ！！」

悔しくて琥珀の目が涙で滲む。

あの日、琥珀の人生は大きく変わった。それなのにそれを目の前の相手はどうとも思っていない。

ただ黒を纏う花嫁が欲しかったと言う理由だけで自分はこの世界に引き込まれたと思うと、身勝手なその理由に怒りで血が沸騰する気がした。

そしてそんな身勝手な理由から護ろうとしてくれたセグナルタまで傷付けた。

許せない、と低い声が頭の中で響いた。

「何をそんなに怒っている？ならばそなたは還してやろう」

しかしそんな琥珀の怒りなど竜には関係なく、眉ひとつ動かさず竜は新たな魔法陣を琥珀の足元に出現させた。

「コハク様！！」

琥珀を光が包み込む。クルトの叫び声が聞こえた。

「そんな事を言ってるんじゃない！やめて！！セグ！！」

琥珀は急速にこの世界から実体が失われていくのを感じた。

「やだ。待って！私、セグに何も伝えてないのに！ありがとうさえ言えてないのに！！」

琥珀は必死で右手をセグナルタに伸ばした。

視界に入った自分の右手は、少し薄れて見えた。

## 第13話

「いい加減にしなさい、ザイド」

落ち着いた柔らかな声が響くと同時に、竜の発動していた全ての魔法陣が消えた。

突然現れたその人は、竜と同じ様に白い髪で金色の瞳だった。

「私はヒナギと言います。我が愚息があなた方に多大なる迷惑をかけた様ですね。すみません。特に異世界の娘さん、本当にすみませんでした」

ヒナギは深々と琥珀に頭を下げた。

「ザイド、暫く謹慎を言い渡します。反省をしなさい」  
それは有無を言わさぬ声だった。

ヒナギは右手の指先で宙に小さな魔法陣を描くと、ピンと弾きザイドに飛ばした。瞬間魔法陣に包まれザイドは消えた。

驚く琥珀達を横目にヒナギは話し始めた。

「あれは私の末の息子でザイドと言います。まだ幼くこちらに向かわすつもりはなかったのですが、あれの強い希望で私が許可しました。本当に申し訳ない事をしました」

ヒナギは再度頭を下げるとセグナルタに近付き、右手をかざした。

何やら言葉を呟くと、セグナルタの傷は綺麗に消えていった。玉も優しい董色に変わっていた。

「コハク様、陛下はもう大丈夫です」

いつの間にかセグナルタの傍にクルトが居た。

ほっと琥珀は安堵の息を吐いた。

「しかし先祖が伝えた言葉は、随分と歪められ変わってしまった様だ」

ヒナギが沈痛な顔で語り始めた。

「元々竜は人間が我々の世界に迷い込まぬ様に、人間界と竜界の結界を護る役目があります。我が先祖も役目で人間界に訪れ、この土

地の娘に恋をしました。その娘は黒い髪と目を持つ娘でした。竜は伴侶を人間からも選べます。争いの続くその土地を憂いていた娘を見た先祖は告げました。『貴女が私の伴侶になってくれるなら、私がこの土地を1000年護ろう。しかし私は1000年しか居られず、1000年毎に新しい竜が来る。その時もまた、何か竜が望むものを与えれば守護は継続する様に凶ろう』と。その後現れた竜も彼と同じ様に伴侶を希望しました。それは決して黒を纏う必要はなかったのですが、花嫁になったのは黒を纏う娘でした。そして代々黒き娘が伴侶となってきました。だからザイドは人間の娘は黒を纏うと勘違いしていたのでしょう」

多分、欲深い人間は竜の守護は欲しかったが、自分達の身内を竜の花嫁にする気はなかった。

考えた結果、初代の竜の花嫁が『色付き』だったのをいい事に、竜の言葉を変えた。黒を纏う娘を望む、と。

そしてタバルの一族が否応なしに選ばれた。

彼らに拒否権など存在しなかった。

「今回の事は私達、竜の側に非があります。関係のないコハクさんを巻き込んだ。決して許される事ではありません。ですので、これからこの国を対価無しに守護をしましょう」

それは思ってもいない言葉だった。

「いや、それでは我々人間が付け上がるだろう。これからは王族の姫をあなた方の花嫁に送り出すのは如何だろうか」

大切な人の声に琥珀が振り返ると、セグナルタがクルトに支えられながらも起き上がっていた。

セグナルタは琥珀と目が合うと優しく微笑んだ。

「いえ、それでは今回の事に対するお詫びになりません。むしろ竜族が得をします」

とんでもないと言わんばかりに、ヒナギが大きく頭を振る。

「もちろん条件を付けさせて頂きたい。守護する竜が決まったら、その竜を一度王宮に寄越して欲しい。そしてその時に王族の中から

花嫁に望む姫を選んで欲しい。だが、姫本人の意志を尊重して貰いたいと思う。それでも構わないだろうか？」

ヒナギはもちろんです、と頷いた。

「私も望んで伴侶になつてくれる姫を貰う方が幸せと思いますので早速ですが、次の守護する者は決まっていますのですが、姫を頂いても構いませんか？」

その場の全員が瞬時に固まった。

「それってさっきのザイドとか言う竜じゃ・・・」

琥珀はヒナギから一歩後退り、セグナルタは大きく舌打ちし、クルトは背後にどす黒い物が見え、ソルは剣を握り締め、兵士達は青ざめた。

そこは一瞬にして混沌と化していた。

「いえいえ、確かにザイドですが後10年程先になりますよ。その間に歪んだ性格と根性叩き直すんで安心して下さい」

につこりと笑ったヒナギの微笑みはほわほわと優しいものだったが、クルトに通ずるものがあると琥珀とセグナルタは確かに感じた。

2人は少しだけ、ザイドを哀れに感じた。

「さてコハクさん。貴女は還る事を望みますか？」

それは琥珀がずっと望んだ事だった。しかし、何故か即答は出来なかった。

「あの、ヒナギさん。少し時間を頂いてもいいですか？もちろん帰りたいです！帰りたいんですけど、やり残した事や伝えてない事がいっぱいあるんです。だから、少し時間を下さい」

それが今の精一杯の答えだった。

「分かりました。でしたら10日後に再び訪れます。それまでに還る準備を整えていて下さいね。さて、とりあえず皆様をお城に送りましょう」

巨大な魔法陣が足元に現れると、琥珀達は光に包まれた。

光が落ち着き目を開けると、そこは既にラドヒューズ城の玉座の間だった。

「陛下、お帰りなさいませ」

片膝を付き、深々とクルトが頭を下げた。

「お帰りなさいませ、陛下！―！」

ソルや兵士達もクルトに倣<sup>なら</sup>う。

「お帰り、セグ」

琥珀も笑顔で迎える。

「ああ、ただいま。迷惑をかけたな、皆の者」

ポンポンと琥珀の頭を撫で、セグナルタは優しく笑った。

## 第14話

その日からセグナルタは仕事に忙殺された。

いくら弟のナイデイルが代行してくれていたとはいえ、所詮は代行。未決済の書類や事項は半端なかった。琥珀はそんなセグナルタを横目に、今日もクルトとお茶を楽しんでいた。

今日も美味しいなあ、とまったり寛いでいると、背筋に悪寒が走った。

「コハク？この状況見てわからないか？私はお前に構っている暇はない」

ひくりとセグナルタの顔が引きつる。

「いやだなあ、セグ。私は構ってなんて一言も言っていないよ？クルトとお茶を楽しんでるだけ」

事もなげに琥珀は紅茶を啜る。

「視界に入るのが邪魔だ。目障りだ。鬱陶しい」

それは久々に発動した、絶対零度の魔王スマイルだった。思わず後退りそうになった琥珀だったが、必死で耐えた。

「だって、思い出作りを・・・」

琥珀はどこかでまだ迷っていた。

「あと3日もすれば落ち着く。そしたら残り2日間は相手をしてやる」

その言葉通りセグナルタは3日で仕事を片付けた。

そしてその日、琥珀は早朝から起こされた。

「コハク、連れて行きたい場所がある。来られるか？」

琥珀がセグナルタに連れて来られた場所は、何もない草原だった。1本の樹を見つけ、二人はそこに座った。

「セグ、此処に何かあるの？」

吹き抜ける風がとても気持ち良い。

何も無い場所だけど、そこから見える景色は美しかった。

「此処はタバルの村があつた場所だ」

それは静かな声だった。

「タバルは、ずっと迫害をされていた。そして強制的に竜の花嫁の責を負わされた。タバルが滅びたのは500年前だ。しかし、滅びはもつと前から始まっていた。彼らは他の村から伴侶を得る事が出来ない。蔑まれ見下されているのだから。そして村の中だけで繰り返される結婚は一族の減少に繋がった。滅びの日の時点で、彼らは20人程になっていた。そしてその日、夜盗が現れた。皆殺しだったよ。老人、女、子ども、全て関係無しだ。村は血の海に変わり、そして火を付けられ炎に包まれた。それがタバルの終焉の日だ」  
謎とされていたタバルの滅びの真相は、残酷なものだった。

「どうしてセグは知ってるの？」

琥珀は見てきたかの様に語るセグナルタに疑問を抱いた。

「見たんだ。この樹が見せてくれた。コハクは気が付いたか？この樹が焦げている事に」

セグナルタに促され上を見ると、確かに一部の枝が焦げ壊死していた。

「この樹は500年前の火事に巻き込まれながらも生き延びた。そしてその記憶を見せてくれた。悲惨なものだった」

琥珀もタバルの一族の末路を思うと胸が痛んだ。

「もう聞いたかもしれないが、この国では黒と言う色が忌み嫌われている。黒をもつ人間を『色付き』と蔑むんだ」

セグナルタが一旦言葉を切ると、突然強い風が吹き抜け琥珀とセグナルタの髪を巻き上げる。

「俺は昔からこの甚大な魔力のせいで畏怖されてきた。両親も俺を表面上は可愛がりながらも怖がっていた。微妙な壁を感じとった俺は自然と誰も居ない場所を好む様になった。その時から闇が落ち着くんだ。だから俺にとって黒は大切な色だった。だからタバルの事も必死で調べた。調べてどうしても火事の事が納得がいかなくてこの場所に來たんだ。真実を知る為に」

その時にセグナルタは知ったのだ。タバルの一族の歴史を。

琥珀がかける言葉を見つけられずにいると、隣に座っていたセグナルタがすくりと立った。

「俺はタバルが滅んだ今、これからは王族が担うべき役目だと思っ  
たんだ。俺は少しずつ変えてきた。竜が現れた時に、王族から花嫁  
が選ばれる様に。しかしあの日、予知夢は異世界から少女を召喚す  
る事を告げた。何としても阻止するつもりだったが出来なかった」  
セグナルタはおもむろに琥珀を振り返ると、深々と頭を下げた。

「俺の力が及ばないばかりに、この世界にお前を喚んでしまった。  
本当にすまなかった」

琥珀には何故セグナルタが謝るのか、理解出来なかった。

「どうしてセグが謝るの？だってセグのせいじゃないじゃない」  
セグナルタは頭を上げようとしない。

「いや、俺は知りながら止めなかった」

「でもセグは私がお城に現れる様にしてくれたでしょ？それだけで  
も充分助けて貰ったよ。それにずっと護り続けてくれたでしょう？  
おかげで私は竜の花嫁にされずに済んだ。それは全てセグのおかげ  
だよ。本当にありがとう」

琥珀は満面の笑みを浮かべた。

「どうしてセグはここまで私を護ってくれたの？」  
ずっと不思議だった。

どうしてセグナルタがこんなに自分を護ってくれるのか。それも命  
すら顧みずに。

「教えない。これは俺が墓場まで持って行く事だから」

セグナルタはにやりと笑い、帰るぞと告げると先を歩き始める。

「どうして？教えてくれないじゃない！セグの意地悪！！」

琥珀はセグナルタに悪態をつきながらも、必死で追いかける。

その後、城へ帰る道中もセグナルタは決して口を割らなかった。

## 第15話

琥珀がぶすくねながら部屋の扉に手を掛けた時、セグナルタが呼び止めた。

「コハク、心は決まったか？迷っていたらどうか？」

それは琥珀がまだ決めかねていた事だった。

「まだ迷っているのか。コハク、元の世界に還れ。お前を待っている人間が大勢居るだろう？」

セグナルタは迷いのない真っ直ぐな目で琥珀を見つめた。

「でも私は、セグと離れるのも嫌！セグが好きなの。もう二度と逢えないのは嫌なの」

琥珀は、平気な顔で帰れと言うセグナルタが哀しかった。だから気が付いた時には想いを口走っていた。

「お前にとつて俺は、本来なら逢うはずのない人間だ」

しかし琥珀からの告白を受けてもセグナルタに動揺なんて一切見られない。

澄んだ菫色の瞳に揺らぎは一切見当たらない。

琥珀は悔しくて哀しくて、泣きそうになった。

「私はセグが好きなのに、セグは私の事なんて何とも思っていないの？」

傷付いた心を隠す様に、琥珀は部屋に飛び込んだ。

琥珀はベッドにうつ伏せになると、枕に顔を埋めて泣いた。

廊下に漏れ聞こえる琥珀の泣き声に、セグナルタはぎりっと手を握り締めた。

ポタリと赤い滴が零れ落ちる。

ヒナギと約束した日は明後日に迫っていた。

翌日琥珀は一日中部屋に籠もった。

セグナルタに会うのが怖かった。

一度の拒絶は想像以上に脅威となった。

琥珀は窓際に腰掛けると部屋から見える美しい中庭を眺めた。そしてこの世界に召喚されてからの事を思い出していた。

見たこともない広く美しい玉座の間でセグナルタに出会った。それは美しい水色の髪、董色の目をした人間とは思えない程に美しい人だった。

でも美しいのは外見だけで、態度も口も性格も最悪だった。

嫌味の応酬が挨拶と化していた。

でも少しずつセグナルタを知っていき、とても優しい人だと知った。護られていた事を知った。

血溜りに横たわるセグナルタを見た時は、一瞬心臓が止まった。瀕死なのにそれでも必死で護ってくれた。

どんな時も自分の事を第一に考えていてくれた。

思い浮かぶのはセグナルタの事ばかりだった。

琥珀はセグナルタが好きだと改めて実感した。

だが、同時に両親や友達の顔も思い浮かぶ。

「心配、してるだろうなあ。でも私は・・・」

―どちらかしか選べないのなら後悔しない選択を。

琥珀の心は決まった。

「コハクさん、返還の儀に参りましたよ」

ヒナギが玉座の間に現れると、既に琥珀やセグナルタ達が待ち構えていた。

「やり残した事がなければ、すぐにでもお還し出来ますよ」

ヒナギは自分の左側に魔法陣を出現させた。

「待つて、ヒナギさん。私は元の世界に帰ると、二度とこちらには来れないの？」

琥珀からの問いを予想していたかの様に、困った顔でヒナギは笑う。「無理ですね。もう二度と貴女のように、この国に異世界から無理矢

理召喚される人間が現れない様に、深く深く封印をしますのぞ」

それは琥珀も予想していた事だった。

多分自分はこちらに帰ると、二度とこちらには来れないだろうと。

「なら私が選ぶべき答えは決まっています。ヒナギさん、封印をして下さい。私はここに残ります」

それは、一切の迷いが見られない透き通った声だった。

「は？何を・・・？」

セグナルタが琥珀に詰め寄る。

「お前は自分が何を言っているのか理解しているのか？二度と戻れないんだぞ？両親や友人が待っているのだろう？還る事を望んでいだろうか？還るんだ！お前の居るべき場所はここではない！」

それは琥珀がこの世界に来て初めて見る、セグナルタの焦った顔だった。

「セグが勝手に決めないでよ！勝手に私の居場所を決めないで！！私はセグが好き。だからこの世界でセグと一緒に生きていきたい。だって私はセグの奥さんになったんでしょう？セグは私を選んでくれたんでしょう？私は絶対に後悔しない。この世界で生きてく事を後悔なんて絶対にしない！！」

ぼろぼろと涙を零しながら、琥珀はセグナルタを見上げる。

セグナルタは言葉が出なかった。

見上げてくる瞳から、琥珀の固い決心が痛い程に伝わる。

セグナルタに何も言葉を貰えないまま時間が過ぎていく。

「陛下の負けですね」

何も言わないセグナルタを見兼ねたクルトが口を挟み、琥珀にハンカチを差し出す。

セグナルタは深々と溜息を吐いた。

見下ろした琥珀の目が、不安そうに揺れていた。

「そうだな。俺の負けだ。わかった。いいよ。コハクが望むならここに残るといい」

淡々と告げられたその言葉は琥珀を更に傷つけた。

それを見たセグナルタは自分の言葉で、琥珀が傷付いたのを感じた。  
「いや、違うな。本当にいいのか？この世界で、俺と共に生きてくれるのか？俺は望んでいいんだな？ならもう俺は遠慮はしない。コハク、俺と共に生きて欲しい」

琥珀はぎゅっとセグナルタに抱き締められた。

「俺もコハクが好きだ」

その言葉は小さく琥珀の耳元で囁かれた。

## 最終話

それからの日々は目まぐるしく過ぎていった。

ヒナギは封印を施すと早々に城から立ち去っていき、琥珀は再び勉強が再開され、いつの間にかセグナルタとの婚儀の日が決められ、琥珀は毎日勉強と婚儀の準備に追われた。

それでもセグナルタに毎日逢いに行き、共にお茶の時間を過ごしたセグナルタは相変わらずだったが、それでも目が優しくなっていた。「いよいよ明日ですね、コハク様」

感慨深そうにクルトが呟く。

いつもの様に執務室でクルトが入れてくれたお茶を飲みながら、琥珀はそうだねと相槌を打つ。

「そう言えばクルトは知ってる？どうしてセグが命懸けで私を護ってくれたのか。どうしてもセグは教えてくれなかったの」

小首を傾げながら聞いてくる琥珀を尻目に、クルトはセグナルタを見つめにやりと笑った。

「まだ言ってなかったんですか、陛下。いい加減教えてあげればいいでしょうに」

クルトはサツと琥珀に向き直ると満面の笑みで告げた。

「それはコハク様が陛下の初恋の方だからですよ」

それだけ告げると、クルトは颯爽と部屋を去った。

バキツとセグナルタの羽ペンが折れる音が響くと、しばらく沈黙が部屋を包んだ。

「私はセグの初恋の相手なの？」

先に沈黙を破ったのは琥珀だった。

左手で顔を覆っていたセグナルタは、諦めたかの様に溜息を吐くと琥珀に視線を合わせた。

「そつだ。10歳の時、予知の力でコハクを見た時からずっと想い続けてきた。逢いたいと願いながらも召喚されなければいいと祈っ

た。でもコハクは予知通り召喚された。だからそれならばせめて護りたかった。大切に想い続けた相手だから。前にコハクは辛くはないのかと聞いたな？俺は日々の努力が全てお前を救う術になると、糧になると知っていたから辛くなかった。俺はちゃんと幸せだったよ」

セグナルタが優しく笑う。琥珀は胸が一杯で何も言えなかった。ずっと昔からセグナルタの想いは始まっていた。

琥珀が無事なら、琥珀が幸せなら、自分の心など殺しても構わないと、自分の身など二の次だと、セグナルタはどこまでも琥珀を中心に動いていた。

琥珀はセグナルタから深く愛されている事を実感した。

「セグ、私達幸せになろうね」

翌日、初めて国民に王妃が披露された。

その王妃は黒く艶やかな真つ直ぐの髪を持ち、赤くふっくらとした唇で肌は白く、王と並んでも霞まない美しさを持った女性だった。何より印象的だったのは、強い意志を秘めた黒い瞳だった。

人々は自分たちが忌み嫌い続けた黒を初めて美しいと感じた。

その後、王妃は傍で王をずっと支え続け、また国民の為に福祉に力を注いだ。

そして王は賢王と、王妃は国の母と呼ばれ、後の世に伝説の王と王妃として語り継がれた。

## 最終話（後書き）

拙い話でしたが最後までお付き合い頂き本当にありがとうございました。

## 君が咲けるように 前編

きつとこれは悪い夢だ。夢を見てるんだ。だから、だから早く目覚めて。

夢なら連れ戻して、『――』。

ぴちゅんつと薄暗い地下室に水音が響く。

部屋の中には両手首を頭上で一つにまとめられ、天井からぶら下がった鎖に拘束された少女が居た。

中途半端な鎖の長さは少女に膝をつく事を許さず、不自然な姿勢で少女はぐったりと目を閉じていた。

―どうしてこんな事になったのだろう？

ずきずきと痛む手首がこれを夢だと少女に思う事を許さない。

―どうして？

つい数時間前まで少女は普通に暮らしていた。どこにでもいる普通の日本の女子高生だった。

学校から帰ってきて、部屋で着替えようと自室に向かい灯りを付けた瞬間、異変に少女は気付いた。

彼女の足元に黒く不気味に光る丸い円が現れていた。

それは映画や漫画で見る魔法陣と言うに相応しく、少女が飛び退く暇も与えずにぶわりと少女を飲み込んだ。

確かに叫んだはずなのに自分の声すら届かない闇に落とされ、ぐらぐらとした気持ち悪い浮遊感を感じ少女はぎゅっと強く目を閉じた。暫くすると浮遊感は無くなり、お尻に地面を感じた。瞼に光も感じる。そして人の気配も。

少女が恐る恐る目を開けるとぐるりと自分を囲む様に人間が存在した。

彼らは8人程で、皆一様に黒いマントを頭から被り、少女はその不気味な気配にごくりと息を飲んだ。

「これが異世界の？」

「こんな少女で本当に成功するのか!？」

「とにかく一刻も早く儀式を――!!」

少女を取り囲んだ人間は口々に少女にわからない事を言った。

――異世界? 成功?? 儀式???

何の事だろう?

「あの・・・ここは一体? あなた達は誰ですか？」

おずおずと口を開いた少女に一斉に視線が集まる。それは無遠慮に少女に注がれた。びくりと少女の身体が震える。

「取り敢えず逃げ出されては適わん。ここは一旦用意が整うまで拘束して地下室に閉じ込めよう」

人々を従えるように少し後ろに居たりリーダーと思われる男の発言に、

今まで遠くに居た兵士が呼ばれる。

少女は抵抗する間もなく地下室に連れて行かれ拘束された。そして鉄格子越しに知らされた内容は少女を絶望させた。

『我が国は疲弊の一途を辿っている。食い止めるには黒魔術による生け贄が必要だ。そしてお前は選ばれたのだ、異世界の娘よ。我が国の為に犠牲になれ』

それは一方的な要求だった。少女の意志など全く関係なかった。用意が出来次第、少女は首を落とされる。その少女の血により黒魔術は完成する。

少女は必死で叫んだ。『出して、還して』と。しかし誰かが来る事はなくやがて少女の声は枯れ果てた。ゆっくりと絶望が少女を襲う。

―どうしてこんな事になったのだろうか？どうして私なの？

一体どれくらい吊されていたのだろうか？

少女は上から響いてきた足音に意識を傾けた。

やがて足音は鉄格子の前で止まり、ゆっくりと少女は顔を上げた。

そこには申し訳なさそうに顔を歪めた身なりの良い頼りなさげな青年が立っていた。

「父が色々と申し訳ありません。今からあなたを逃がします。僕があなたを喚ばなければあなたはこんな場所に閉じ込められずにすんだ。本当に申し訳ありません」

青年は深々と頭を下げ、鍵を開けようとした。

しかし突然青年の動きが止まった。

「余計な事をするな。漸くお前も役立つ時が来たかと思えば……。やはりお前は役立たずでしかなかったか」

冷たい声が響くと同時にどさりと青年の身体が崩れ落ちる。背中には短剣が刺さっており、胸元を中心に赤い血が広がった。

一瞬何が起こったのか分からなかった少女だが、赤い血に全てを悟った。

最早恐怖で何も喋れない少女は、光を喪った青年の瞳に深い絶望を見た。

「無駄な希望は捨てる事だ。お前は死ぬ、我が国の為にな。光栄に思え」

男は兵士を引き連れると再び去って行った。

暗く黒く塗り潰されていく意識の中で、少女は最愛の青を思い浮かべる。夏の空の様に爽やかで美しい青。

「助けて、ジーク」

ぼたりと涙が零れ落ちた。

## 君が咲けるように 前編（後書き）

まだまだ意味不明な箇所があるかと思いますが、残りの2話で説明出来ると思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2130v/>

---

落花流水

2011年10月12日01時58分発行